

女性クラブと革新主義

栗原 涼子

Women's Club and Progressivism

Ryoko KURIHARA

This paper discusses the formation and the development of the Women's Club movement, focusing on the activities of the General Federation of Women's Club. The relationship of the GFWC and woman suffrage is the main theme of this paper. The associationism and the progressive impulse pushed women to join GFWC. It is a ready-made constituency, since existing clubs lost none their autonomy. In addition, GFWC's reform work was a typical response to the progressivism.

1. はじめに

女性クラブは Women's Christian Temperance Union (女性キリスト教禁酒同盟) と同様に19世紀後半の「家庭内フェミニズム」を体現したアメリカにおける中心的組織である。全国規模の全国女性クラブ連合は1890年に設立されたが、それ以前に結成された様々な改革組織がその母体となっている。女性クラブの会員の多くはいわゆる有閑階級に属する中産階級白人女性であった。19世紀後半、産業化の進展により男性が家庭外での労働を担うようになった結果、家庭は女性の領域であるとの概念が強固になった。賃労働に就く機会が与えられていなかった当時、女性は女性の持つ家庭的、道徳的特性を強調し、女性性を根拠として改革運動を行った。

この期の女性による改革を考察するとき、「女性の領域」の概念の検討が重要となる。1970年代に多くの歴史家が指摘したように、女性の本質性の強調は第1派フェミニズムの戦術であり、本質主義的還元こそが政治であったことも否定できない。一方、「女性の領域」の主張は一見相反する「女性の権利」の概念と密接に結合していた。このことは女性の権利運動の中核とされる女性参政権運動の中にみられる便宜主義、家庭内フェミニズムを担った組織、たとえば女性キリスト教禁酒同盟、女性クラブなどが時に自己矛盾とも受け取れるような本質性に基づく議論の放棄を行い、権利要求に敏感に反応している点に見られる。女性クラブは

穏健な組織として「女性の領域」を守りつつ、限定付きながら公的活動を行うことを目指した女性の組織であった。

本稿では女性クラブ運動の発生に至る歴史的背景ならびに全国女性クラブ連合の母体となる組織についてはじめに検討し、続いて全国女性クラブ連合がいかにして設立され、発展したかについて述べる。次に女性の領域についての本質主義と権利思想との関連で、全国女性クラブ連合が女性参政権を受け入れた過程について検討する。革新主義のなかでの女性クラブ運動の役割、革新主義とこの期の女性運動との共犯的関係について考察することも本稿のテーマとなる。

2. 女性クラブ運動の発生と母体となる組織について

(1) 発生

1868年、女性クラブ運動のなかでも最も影響力の大きかった組織、文芸クラブが設立された。この詳細については後述する。これ以前、女性の権利、参政権、禁酒等の活動にたずさわっていた女性は少数であった。「政治活動」は女性の領域ではなかった。「女性の領域」の信奉者は自己犠牲と献身を重んじたため、ボランティア、慈善事業にそのエネルギーを振り向けた。中でも宗教活動は女性の領域として開かれていたため、女性たちは教会に集い、聖書を読み、そこで社会悪について語り合った。1834年、New York Moral Reform Society (ニューヨーク道徳改革協会) が設立された。女性の領域を守ることで男性文化に挑戦する家庭内フェ

ミニズムを担った組織の出現である。NYMRSは女性クラブ運動とは異なるが、思想的には女性クラブ運動はこうした改革運動の延長にある。協会の機関誌 Advocate of Moral Reform (道徳改革の主張)は1837年までに一万六千五百部を発行している。この数字は道徳改革が多く女性の支持を得ていたことを意味する。協会は主に排娼運動に取り組んだ。改革運動家の中には奴隷制撤廃や女性参政権のようなラディカルな思想に取り組んだ女性もいたが、多くの女性たちにとって「自己改革」は「権利要求」より身近であり、また社会的にも安全であった。

女性が改革運動に向かった原動力として、産業化による家庭内労働の減少、移民者の増加による家庭内労働力の付加のほかに、女子教育の拡大がある。当時の女子教育は女性の道徳性の強調、家庭内での女性の役割を重視するものであったが、他方、女性は自然科学を含む多くの科目を修得し、図書館や実験室で自主的な学習をすることも許されていた。教育は自己実現への欲求を生み、改革運動や執筆活動へ女性たちを向かわせた。たとえば、マサチューセッツ工科大学の化学の大学院での学位を女性として初めて得た Ellen Richards (エレン・リチャード)は、自らはラディカルではなく、参政権の信奉者でもないとし、家庭的な女性であることを繰り返し主張することにより男性の敵意を一掃した。彼女は後に家庭科改革運動の中心となった。執筆活動も女性向きとされた。女性作家が中心となり、文芸クラブ運動は展開していくが、彼女たちは女性が道徳的な家庭経営者であることを主張し、「女性の領域」を踏み越えず、ほんの僅かでも家庭外に目を向けることが自己改革と認識したのであった。文芸クラブは南北戦争後、急激に拡大した。

ソロシス (文芸クラブ) とニューイングランド女性クラブ (NEWC) が「家庭内フェミニズム」を支えた女性クラブの前身である。両組織ともに1868年に結成され、19世紀の女性クラブ運動の拡大の礎を築いた。会員の関心事は自己改革、家庭性と道徳性に基づく性差別への批判である。この点で、「家庭内フェミニズム」は女性性を肯定しつつも、女性性を再定義する要素を含むものであったと言える。

(2) ソロシス

Jane Cunningham Croly (ジェイン・カニングハム・クロリー)がソロシスの創始者であり、アメリカの女性クラブ運動の中心人物である。1829年、英国に生まれたクロリーは1841年、ニューヨークに移民者として渡った。1855年、「ニューヨーク・トリビューン」に初の

記事を掲載、以来合衆国初の女性コラムニストとして活躍するようになった。1856年に結婚、4人の子供を育てながら執筆活動続け、彼女は1889年、夫の死後、合衆国初のジャーナリズムの教員として、コロンビア大学的女子部ラトガーズ女子大学で教鞭をとる。クロリーはジャーナリズムをとおして女性の問題に目覚めた。その結果、女性は家庭経営で培った能力を家庭外で発揮する事が大切であると考えに至った。また、産児制限の知識が普及していなかった当時、女性の使命は母性にあり、女性の自己実現は息子をとおしてのみ可能であるとする「共和国の母性」の思想に対しては、幾分かの共鳴を示しつつも、女性の人生の目標は決して母であることにとどまるものではないと主張している。「少女たちの希望はすべて彼女たち自身の固有な夢に向かっています。何故に彼女たちは世界の偉大な人々のリストに数えられるべきではないのでしょうか?」⁽¹⁾とクロリーは問う。女性が公的分野に参加するには家事に使う労力を減らすことが肝要であると彼女は考えた。1889年、彼女はニューヨークに女性記者クラブを設立したが、女性がこれまで記者クラブに所属していなかったことを鑑みるに、このことは画期的な事件であった。クロリーはまた女性のための Association for the Advancement of Medical Education (医学教育推進協会)の副会長でもあり、Women's Endowment Cattle Company (女性畜産基金株式会社)の社長も務めていた。しかし、クロリーの最大の目標は女性が教育を受け、男性社会の中でキャリアを築くことであった。女性クラブは女性が集い、個人的、社会的問題を議論する場となる。折から女性参政権運動が活発化していた。クロリーは参政権には賛成であった。しかし、当時政治的平等を求めることは女性の領域の否定であり、当時の風潮への挑戦になりかねないとの立場から、彼女は運動とは距離をおいた。家庭という女性の領域をあくまでも守りつつ、女性の地位の向上を求めること、クロリーと女性クラブが目指したものはここにあった。

1868年、最初のクラブの集会が持たれ、そこで会の名は「ソロシス」と決定された。クラブは月に二回開かれ、五ドルの入会金を支払うことが決定された。会員の多くはキャリアを持つ女性であり、そのメンバーには芸術家、法律家、医者、強固な奴隷制撤廃論者、ユートピアコミュニティーの住人、参政権論者など多様である。会員のほとんどが他の改革組織にも所属していた。そのなかには上院法務委員会で女性参政権についての発言をした Isabella Beecher Hooker (イサベル・ビーチャー・フーカー)、New York Woman Suffrage

Association(ニューヨーク女性参政権協会)の会長 Charlotte Wilbour (シャーロット・ウィルブア) もいた。ソロシスの結成時、クロリーは参政権や宗教についての議論は避けるよう指示したが、時には彼女の意に反する主題も取り上げられた。ソロシスはその結成の目的を次のように規約として掲げている。

この組織の目的は文学、芸術にたずさわる女性の間の快適かつ有意義な交流を促進することである。…そしてまた、それは同じような目的を持つ女性の間にある種の共通の理解を形成し、相互扶助し、友好的な交流をさまたげる習慣や社会的儀礼から来る障害を取り除くことにある。それは女性の間の新しい事実や原則についての議論の機会を提供し、その結果女性の将来と社会の福祉に重要な影響力を公使するものである。⁽²⁾

女性のための活動はすべての人間のための活動であり、ソロシスの目指すものは女性の領域を全うすることで人類の福祉に貢献することであった。とはいえ、ソロシスはラディカルと考えられた領域への支援は行っていない。結果、ソロシスは「中産階級の保守的な女性への貢献」のみを支持した。たとえば、1868年、Susan B. Anthony (スーザン・B・アンソニー) が Working Women's Association(労働者女性協会)への支持を促したとき、ソロシスは公式にそれを拒否した。女性参政権運動家と女性労働者が女性のための労働組合を作る提案にはクロリーは自分たちの活動に集中したいとの理由でこれに反対した。⁽³⁾彼女は自己改革こそが重要であるとし、「ソロシスの仕事は特定の改革に組みすることではなく、あらゆる方面の改革に希望と影響力を与えることである」と述べている。⁽⁴⁾

ソロシスの女性クラブ員は教育が女性の社会的地位を向上させると考え、男性と同程度のそして同種の文化に女性が接することを目標とした。1876年、ソロシスはコロンビア大学とニューヨーク大学に対して、女性の入学を認めるよう要請した。同時に Emma Willard (エンマ・ウィラード) 基金を創設し、貧しい女性へ奨学金を寄贈した。イエール大学の大学院に女性の入学が許可されたとき、Elizabeth Cady Stanton (エリザベス・ケイディ・スタントン) に演説を求めたのも彼女たちであった。

ソロシスの会員は女性の健康にも関心を持ち、墮胎、中絶に関する講義を1872年2月5日に行い、それ以降、何度も健康に関するテーマで講義を開催した。服装改革も健康と深く関わるテーマとして論じられた。具体的には「ウーマンズ・ジャーナル」をとおして、洋品

店、美容院、靴屋に対して健康を損なわず、しかもエレガントなデザインの商品を作成するよう要請している。「淑女」であることを強いられていることからくる不満を見つめ直し、女性の自意識を喚起し、「家庭内フェミニズム」という攻撃的ではない手法を採用した点がソロシスの改革の特徴である。

(3) ニューイングランド女性クラブ

ソロシスの結成と同年、ニューイングランド女性クラブ(NEWC)がボストンで設立された。「人類愛、結婚、家庭生活を唯一絶対的に重要なものとして、それらに忠誠を誓う」との宣言どおり、ニューイングランド女性クラブは家庭内フェミニズムを唱道する保守的組織として結成された。⁽⁵⁾ Caroline Severance (キャロライン・セヴァランス) がクラブを率いた。五人の子供の母でもあり、奴隷制撤廃、禁酒、食生活改善、女性参政権などの多様な分野で活動していた彼女は、1855年、クリーブランドからボストンに転居した。その地でラディカルなクラブや宗教の自由を求める協会に参加した経緯で、彼女は多くの改革者との友好を深め、社会問題に深い関心を抱き、新たな女性クラブを結成する意欲を持った。1868年2月、NEWCの設立会議に続き、5月30日、初の大会が開かれ、11月以降は毎週会合が持たれた。NEWCの会員はキャリア志向というよりはむしろ文筆の領域での先駆者を多く抱えていた。会員の一人 Julia Ward Howe (ジュリア・ワード・ハウ) は公衆衛生、平和運動、参政権、女性の権利など多くの改革にたずさわっていた。また Ednah Dow Cheney (エドナー・ドウ・チェネイ) は宗教、教育の分野を中心に女性のみならず黒人の解放のためにも尽力した。彼女は女性参政権運動家でもあり、マサチューセッツ女性参政権協会ならびにニューイングランド女性参政権協会でも活躍している。当時のアメリカ女性参政権協会の中心人物であった Lucy Stone (ルーシー・ストーン)、Mary Livemore (メアリー・ライブモア) もNEWCの会員である。女性クラブの中では数少ない例であるが、セヴァランスが男性の入会により女性の成長が阻まれるのではないかと危惧しつつも、男性の入会を認めたことも特徴的である。

ソロシスが自己実現をその活動の根幹としたのに対し、NEWCは社会改革を活動の第一目標とした。そのために最大の改革の一つとして女性参政権をも1872年に取り上げ、結果参政権支持の会員が多数を占めた。教育に関する参政権は特に女性にふさわしいものとして支持された。NEWCの会員の多くはマサチューセッツ女性参政権協会の会員でもあった。このことはN

EWCが早くから「女性の権利」の視点を持っていたことを示唆する。1872年から1874年にかけてNEWCの教育委員会はボストン学校委員会に対し、女性委員の選出を依頼した。女性は愛情深く、子供の要求をよく認識しているという理由で、彼女たちは学校における決定の場に女性を参加させることを要望したのである。その結果、ボストンは女性に教育に関する参政権を与えた初の市となった。1873年、4人の女性が委員に選出された。論議の結果、マサチューセッツ州議会は1874年12月に彼女たちを正式に委員に任命した。NEWCは服装改革にも尽力した。NEWCの服装改革委員は女性の健康を守り、デザインも優れている衣服の制作を求め、活動した。

(4) 女性の進歩のための協会

1869年、ソロシスのジェイン・カニングハム・クロリーはニューヨークで開催された「女性会議」の予備会議に様々な問題についての関心を持つ女性の代表が集結するよう呼びかけた。「女性会議」の予備会議をクロリーが開催することで、女性クラブが女性運動の中心的な位置を占めることを意図したものと考えられる。この年、エリザベス・ケイディ・スタントンとスーザン・B・アンソニーはNational Woman Suffrage Association(全国女性参政権協会)を、ルーシー・ストーンらはAmerican Woman Suffrage Association(アメリカ女性参政権協会)を設立した。クロリーの意図は、参政権運動家に対抗し、穏健な女性組織を結成することであった。したがって、クロリーは、会員に幼児教育、家庭経営といった女性の領域とされる活動に従事するよう指示し、彼女の目標が義務に忠実な女性育成であることを表明した。彼女は「女性会議」は女性参政権のような自己中心的なものではないとして次のように論じた。

「女性会議」は女性たちに自分たちが求めているのは人類全体の福祉と向上であり、地位や権力を個人的に追い求めるものではないことを示した。この意味で、「女性会議」はいわゆる「女権」とは関わりないものであることが理解できよう。女性会議で示されたものは女性の義務の確認であり、それらを遂行するやり方を提案するものである。「女権」のリーダーたちは私たちが心から感謝すべきこと、称えるべきことを行っているが、その議論や要求は現行の「女性会議」の考慮の対象外にある。⁽⁶⁾

クロリーの宣伝は一般には普及したとは言えないであろう。「ニューヨーク・トリビューン」誌もスタント

ンがそのメンバーであることを指摘し、女性会議はラディカルな危険に満ちたものであると論評している。⁽⁷⁾ 女性会議は1869年10月21日、23日、30日にニューヨークで開催された。クロリーは女性が自己犠牲を強いられてきたこと、女性の無償労働に言及し、女性に従属的な地位に陥れている元凶を経済力の無力の中に見いだし、以下のように述べた。

男性は自分のために働く。女性は他人のために働く。自己犠牲が女性の美德であった。…十人中九人の女性が日々の糧を他人から得ている。女性差別は女性が賃労働を行っていないために存在するのではなく、女性の労働が認められていないために、言い換えれば支払われていないゆえに生ずる。⁽⁸⁾

クロリーは女性の抑圧の解決を参政権のような政治的権利に求めず、実質的に女性の生活を保障する賃金に求めた。参政権は当時、男性の領域への女性の参加を意味し、女性の領域とは相反するものであるとの主張が多く見られた。クロリーらの称える「家庭内フェミニズム」が女性の従属的状况を一般の女性に認識させる手法として説得力があった。

1873年10月14日、15日に「女性の進歩のための協会」設立に関する呼びかけが以下のような形で提出されている。

女性の発展に関心のある女性たちの間で、意見交換、調和的行動を緊急に必要とするため、私たちはニューヨーク市で開催される女性会議にこの呼びかけを送るものである。この会議において私たちは女性の進歩のための協会を設立するよう望むものである。協会は毎年、大会を開催するものとし、その場で最先端の思想家、作家の優れた思想、冒険的手法が紹介される。そのために、私たちは目的にかなった女性組織からの代表者や目的に共鳴する作品を募るものである。次のような女性がこれに該当する。宣教師、教員、大学教授、医師、芸術家、法律家、企業経営者、編集者、作家、慈善事業家である。他の人たちの見返りを期待するのではなく、他の人のために心より働くことを実践している人たちである。この呼びかけに加えられている名前は最初のメンバーである。会員への応募は改めてこの呼びかけへの署名により行われる。署名者のための予備会議は10月14日火曜、午後7時30分に西23番街332号室にて開催される。これに続くセッションが翌日から3日間、26番街、メジソン・ユニオンリーグのホールで、午前10時30分から午後7時30分まで行われる。

サラ・H・アダムス、ボストン、マッサチュ

ーセッツ

A・A・アレン、アルフレッド大学、アルフレッド、ニューヨーク

マリー・アンドリーフ、ニューヨーク市⁽⁹⁾

1873年10月15日、ソロシスは全国組織として「女性の進歩のための協会」(The Association for the Advancement for the Women)を設立した。女性の男性とは異なる道徳的感情をアメリカの社会問題解決のために使うべきであるというのが設立の趣旨であった。会員は300人ほどのエリート集団であり、男性の参加も認めてはいたが、実質的にはAAWは女性の組織である。「ニューヨークヘラルド」誌はスーザン・アンソニーやヴィクトリア・ウッドハルのような権利運動家、自由恋愛主義者中心の組織とは異なる女性団体が登場したとしてAAWの保守主義を礼賛している。⁽¹⁰⁾

第一回大会では「女性に知的、道徳的、肉体的に快適な状況を確保する実際的方法を模索し、家庭と社会の関係を改善する」ことに合意した。女性会議は女性の意見交換の場であり、また女性に自己変革の機会を与える場でもあり、女性による組織結成を推進する契機ともなったと言えよう。その一例にセイント・ポールにおける特別会議報告がある。この報告は女性の意識変革を促す契機となった。

私たちの会議は市の小さな公会堂の一つで行われた。ニューセンチュリークラブの会長と会員、またセイント・ポールから多くの女性たちが私たちを出迎えた。午前10時にジュリア・ワード・ハウ夫人が開会の辞を述べ、いくつかの時宜にかなった挨拶の後に協会の特徴と目的を述べ、次にコロラド州デンバーからの来客ミッチェル夫人を紹介した。彼女は「芸術」についての学術的な論文を読み上げた。アダムズ夫人はおよそ5分間、「芸術における女性の影響」について話した。ハウ夫人は「アメリカにおける異人種」について、またネブラスカのコブライ夫人はイプセンの「人形の家」批判を講じた。午後の会議では、マサチューセッツ州、デッドハムのウォルコット夫人が「人工的ではない教育」について、ミシガン州デトロイトのオクタヴィア・ベイツは「大学における女性」についてそれぞれ論文を読み上げた。さらにマサチューセッツ州のマード・ハウ・エリオットはニューヨーク副知事の報告を、メディソン州バルティモアのE・V・マーク博士は「インフルエンザ」について、ライプライ氏は「教育の一環としての力と時代の賢明な経済」について発表した。セイント・ポールとミネアポリスの女性による発表

に関する討論の後、特別会議は終了した。⁽¹¹⁾

AAWの会員がしだいに参政権をも主張するようになった過程については後述する。AAWでは参政権と家庭内フェミニズムは対立的概念ではなく、共存できるとする主張が生まれる。AAWの会員は参政権を含めた社会問題を議論するときに、女性的な手段、手法を取った。AAWが取り上げたテーマは数多く、また参加したメンバーも多彩である。当時、最もラディカルであると考えられたメンバーの多くがその活動に参加していたことは注目に値する。その中には、Catherine Beecher (キャサリン・ビーチャー)、Francis Willard (フランシス・ウィラード)、Harriet Beecher Stowe (ハリエット・ビーチャー・ストウ)、エリザベス・ケイディ・スタントンも含まれる。テーマの中心には、家庭と母性、家事の簡素化があり、服装改革も称えられた。また、会員は女性が仕事を持つことをも支持した。E. D. Sewall (セウォール) は「独身女性のための家」と題して、第14回の会議でスピーチを行い、その中で独身女性が自分の家を持つ権利があると述べた。Mary Livemore (メアリー・ライブモア) も独身女性を称賛し、以下のように語った。

自分が愛していない男性から結婚を求められたとき、彼女たちは自分一人で歩くことを選んだ。口ではノーと言い、心ではイエスを叫んだ。自らの幸福を犠牲にすることが女性の義務だからである。彼女たちの人生は後に続く女性たちの踏み台である。⁽¹²⁾
この例はAAWが個の概念に言及し、すでに家庭内フェミニズム、家庭中心主義、女性文化の概念を踏み越えていたことを示唆する。

AAWが政治、特に女性参政権に関心を抱いた原因の一つが、アメリカ女性参政権協会会員のジュリア・ワード・ハウのリーダーシップである。クロリーが活動から離れると、ハウを中心とした参政権支持派が勢力を拡大した。この変化は1876年から1881年にかけて起きた。家庭内フェミニズムと参政権を結びつけた便宜主義を率いたのはハウである。1881年、参政権を持ち出すのは好ましくないと感じた折り、彼女は「参政権論者ではありませんが、ここでそれを語るつもりはありません。」と述べている。⁽¹³⁾一方、ハウを中心とする参政権支持派は「家庭内フェミニズム」を根拠に、家庭内でのモラルを正すとともに、道徳を広く社会に広めることが女性の役割であると説いた。しかし、このような思想以上に効果を持ったのは彼女たちの風貌や物腰であった。新聞は「美しく着飾った女性」と彼女たちを報じ、彼女たちの論調にはあまり触れていない。

1890年代頃から、参政権運動家の間でも「権利論」よりむしろ「便宜主義」が主流になったことを鑑みるに、社会が捉えた固定的イメージが実質以上に女性運動に大きな影響を与えたと考えられる。ニューヨークヘラルドは次のように伝えている。

これら女性会議に集まった女性たちは自分たちの性のためにより理性的に働き、唯一投票権しか知らない参政権論者より成功したように思える。⁽¹⁴⁾
シラキューズデイリージャーナルも同様な報道をしている。

この国の女性の偉大なる集まりの多くが三つの際だった特色を持つ。辛辣さ、毒舌、そして「投票権かさもなくて死か」である。しかし、女性会議はそうではない。…力ではなく愛がここにいる妻や母たちの原動力である。⁽¹⁵⁾

AAWの戦略、便宜主義が成功した例をここに見いだすことができる。1897年のスプリングフィールドでの会議が女性会議の最後である。全国女性クラブ連合がこれに変わる組織として拡大していった。

(5) 文芸クラブ(Literary Clubs)

1870年代から90年代にかけて、他のクラブ運動に触発されてとくに年輩の女性たちの間でキャリアを目指さない文芸クラブ運動が盛んになった。文化を学び、教養を高めることは「家庭内フェミニズム」の重要な側面である。19世紀後半の女性は高等教育を受ける機会を得たが、多くの女性は結婚し、子育てに迫られたため中高年期に再び学習意欲を持ち、また時間的余裕も得た。独身の女性も少数ではあったがこのクラブ活動に参加した。文芸クラブは女性は夜は家にいるべきであるとの考えから夜間は開かれなかった。また、夫の職業や社会的地位によりクラブのメンバーが決まる傾向にあった。クラブの中には会員資格50歳以上を掲げているところもあり、また制限を設けていない場合でも会員の平均年齢が50歳を越えているところが多かった。人種、エスニシティーによる制限も加えられた。北部の奴隷制撤廃論者によって創設されたクラブでさえ、黒人の会員を認めなかった。アイルランド系、ドイツ系移民者もほぼ会員資格を得られなかった。エリート主義が会員間に顕著に見られる。人種、エスニシティーによる女性間にある差別主義は第一派フェミニズムの特質の一つである。近代社会設立の過程で、体制内改革思想であるフェミニズム思想が国家主義と結びつき、それゆえに人種主義を取ったという点は驚くには値しない。

家庭内フェミニズムを主張するために、女性たちは話術、組織力、指導者としての技法を学んだ。保守的と考えられる女性がスピーチを行ったことには大きな意味があった。フェミニズムはもはや限られた一部の女性のヒステリックな叫びではないとの評価が与えられたからである。Charlotte Perkins Gilman (シャーロット・パーキンズ・ギルマン) はクラブでスピーチを行い、女性たちを勇気づけたが、彼女の言葉によれば文芸クラブは女性間の連帯を深め、「お互いを愛することを学んだ」場であった。⁽¹⁶⁾クラブの運動に参加したために、女性が自家製のパイを焼かなくなったと嘆く男性もいたが、夕食の支度に間に合えばよいとする男性も多かった。クラブ運動は当初、女性の本質性に何ら挑戦するものではなかったが、活動が公に認められ、会員数も増加するに従い、女性の地位向上、自立を目的とし、そのために逆に女性の特殊性を便宜的に利用するようになった。

(6) 女性教育産業連合 (Women's Educational and Industrial Unions)

女性教育産業連合(WEIU)は1877年にボストンとバッファローで設立された。WEIUと他の女性クラブとの相違の一つはWEIUが階級を越えた連帯を目指していた点である。また、家庭内フェミニズムを追求した結果、理想の家庭実現のために家事の共同化を提唱したことも特徴的である。

ボストンのWEIUの女性たちはボストンの貧しい人々を救援した。階級を越えた共同と慈善活動によって社会全体を改善しようという改革への意欲がその動機である。社会は家庭の延長であり、女性は社会問題に対しても女性的な繊細さと優しさをもって解決に当たらなければならないと彼女たちは信じた。一方、クラブ運動は初期のキリスト教に根ざした慈善活動とは異なり、宗教性を持たなかったため、女性の領域を侵しているとしてジャーナリズムからはたびたび批判された。これに対しWEIUは女性の場が唯一家庭であるという意見はしだいに消えていくであろうし、女性が外でその知性を発揮することは家庭という王国を統治する女性にふさわしいと反論している。男性は仕事に忙殺されているため地域社会の問題に費やす時間がない、という理由も女性の活動の根拠として提示された。WEIUの地域への貢献はしだいにその重要性を増した。ボストンから発した運動は多くの主要都市へ波及し、全国女性クラブ連合をはじめ地域のあらゆる女性クラブが同様な活動を担った。ボストンのWEIUの創始者である Harriet Clisby (ハリオット・クリス

バイ）は22歳ですでに若い女性のためのコミュニティーハウスを経営し、雑誌の編集者でもあったが、フェミニストの医師 Elizabeth Blackwell（エリザベス・ブラックウェル）の著書に刺激され、医師になるべく31歳で祖国であるイギリスに戻った。ところが、イギリスでは女性は医科大学に入学することが許されていないことを知り、アメリカへ移民として移住することを決意した。ニューヨーク医科大学で、彼女はフェミニストである Clemence Lozier（クレメンス・ロチエ）教授に出会う。女性が教育も受けられず、自らの身体についての自己決定権もない現状を憂え、彼女は女性運動への関心を深めた。クリスバイはニューヨーク市で Henry Ward Beecher（ヘンリー・ワード・ビーチャー）が設立した専門職の女性のための家に住み、スーザン・アンソニーの指導のもと、Working Women's Association（働く女性の協会）を居住者とともに作った。1865年に医科大学を卒業し、彼女はボストンで20年間、医者としての人生を送った。1873年から彼女は日曜の午後に道徳的精神的議題について議論するための宗教的会合を持ったが、ここに参集した女性たちは女性としての自己改革に目覚め、1875年になるとこの会合は女性の組織として発展した。クリスバイはそのときすでに、女性を勇気づけ、女性の地位を向上させるための組織設立を思い描いていた。彼女は女性が組織化し、協力し、男性が結束しているような絆で結びつくことを願った。クリスバイがボストン WE I U を設立したのは1877年である。会員数は1887年に千二百人、1915年には四千五百人となった。WE I U は依然として女性の道徳的、精神的側面を重視した。一方、クリスバイは教育の必要性に着目した。

教育に関するプロジェクトを推進したのは Abby Morton Diaz（アビー・モートン・ディアツ）である。彼女は1881年から1892年まで WE I U の副会長を、1892年から1902年までその会長を務めた。クリスバイと同様、ディアツは家庭的であることを女性の持つ「資産」として。自伝の中で彼女は「強い精神を持つ女である」と自称し、「参政権論者であるが、家事も行い、病人の世話もしている」と語っている。⁽¹⁸⁾彼女にしても女性の道徳的優位性への信奉、女性の本質性への信頼があった。したがって、男性は女性に対して女らしさについての指導などできないし、生活のための技術を持たない女性がアル中の男性と結婚したような場合、その結婚は売春同様であると彼女は断っている。⁽¹⁹⁾彼女はまた、愛のない結婚を批判し、家事の簡素化を説いている。WE I U が貧しい女性を支援したことは前述したが、メンバーは女性に対して積極的に就労の場

を作った。初期には商店を経営したり、事務所を置いたりというような実際の行動を取った。また、「交換の母」と呼ばれるバザーを開き、ホームメイドの手工芸品やパンや菓子を販売した。WE I U が夫の収入は妻のものではないとの立場を取ったことも注目に値する。多くの中産階級の女性たちは仕事を持っていなかったが、仕事を求める必要のあることは認めていたということの表れである。

WE I U がプロビデンス・ストリートにランチルームを作り、安価で栄養価の高い食事を供給したことを皮切りに、1890年には各地のランチルームが作られ、4万5千食の食事を供給した。このランチルームは貧しい女性には労働の場を与え、富裕な女性には解放の空間を与えた。また、WE I U は女性の健康への関心を高めることにも貢献した。医師による健康についての講演、健康相談所なども持たれた。

WE I U のボストンに次ぐ組織はバッファローで設立された。バッファローでの著名な活動家に Harriet Austin Townsend（ハリエット・オースティン・タウンセント）がいる。クエーカー教徒の母と法律家の父を持ち、タウンセントは女性参政権のような思想にも触れる機会を多く持った。22歳で結婚後、彼女は社会活動に目を向ける。彼女は未婚の母のための家の経営に取り組んだ。メサイヤ教会の文芸クラブの創始者でもあった彼女は女性会議にも出席し、バッファローの女性たちとの親交を深めた。参政権は大切であると考えてはいたが、参政権運動はせず、彼女は投票がすべてではないとの態度を表明した。⁽²⁰⁾ Cahrity Organization Society（女性の慈善協会）への協力が WE I U の結成の契機となった。COS は男性主導の組織であり、1892年まで女性の参加を認めていない。女性は補助的役割に甘んじていた。COS の女性会員は、女性による組織の必要性を痛感していた。1884年3月、WE I U 初の会合に出席したのはジュリア・ワード・ホー、フランシス・ウィラードといった著名人であり、その後、バッファローの WE I U もボストン同様に女性による慈善組織としての評判が高まった。バッファローの WE I U は貧しい移民者を労働者として使用する訓練をし、実際には彼女たちを家事労働者として雇用した。これに対しては批判もあったが、タウンセントは「すべての人種に適切な領域」というジョン・スチュアート・ミルの言葉を用いて自らの行動を正当化した。移民者女性たちが「快適な家で賃金を得る」ことができるように支援することは慈善的行動のように受け取られかねないが、これらは階級差を肯定したものに他ならず、階級による分断であり、移民者女性の解放には

ならない。WEIUの女性の考えた人権思想は「白人」の人権であり、「白人女性」の人権であった。男性の人権から「白人女性」の人権へという発想は第1派フェミニズムの特徴でもある。従って、この場合、慈善は白人富裕者の自己満足になりかねなかった。この点で、バッファローのWEIUはボストンのWEIUより視野の狭いものとなった。1887年、バッファローのWEIUは女性キリスト教禁酒同盟やYoung Men's Christian Association(青年キリスト教協会)と協力し、女性がスポーツを行うことを奨励した。また、1893年には子供の親権を母親にも認めさせるためのロビー活動も行った。1916年に解散した折り、WEIUは女性のための組織と言うよりむしろ、市民のための組織となり、当初の目標を達成した。とはいえ、先にも述べたように、労働者階級を救済の対象とのみ認識した点は、権力者の発想を越えるものではなく、当時のフェミニズムの限界の一端を示しているものと言える。以下、全国女性クラブ連合の成立について検討する。

3. 全国女性クラブ連合

(1) 設立

1890年、4月23日から25日にかけて、全国女性クラブ連合がニューヨークで結成された。この年、ジェイン・カニングハム・クロリーが文芸クラブを統合し、全国組織を結成することを提唱した。その目的は女性の領域の価値を再考することであった。女性の感性を公共の場で生かすこと、それは当時、政治に参画することが不可能であった女性にとって大きな目標となった。前述した「女性の進歩のための協会」がこのアイデアを実現するネットワークを持っていた。一方、女性キリスト教禁酒同盟(WCTU)の戦術からクロリーは多くを学んだ。

National Council of Women(全国女性協会)は参政権運動家により設立されたが、全国女性クラブ連合の先駆けとなる組織である。NCWの結成のための会議は1888年3月25日から4月1日にかけて、53の女性組織が首都ワシントンに結集し、セネカ・フォールズの女性会議の四十周年を記念して開かれた。この会議を招集したのは全国女性参政権協会である。WCTU、宗教界、専門職、教育職、労働騎士団、グレンジ、平和運動、慈善組織などから多くの女性が集合し、アメリカ女性参政権協会からもルーシー・ストーン、ヘンリー・ブラックウェルらの代表の参加を得た。40年間の女性の功績をたたえるスピーチに続き、National Council of Women(全国女性協会)とInternational Council of Women(国際女性協会)を創設し参政権、

禁酒、その他の女性組織を統合する案が示された。エリザベス・ケイディ・スタントンは参政権組織の国際的展開を視野に入れていた。しかし、全国女性参政権協会は参加者を参政権運動家に限定せず、参政権反対論者をも招待したため、その場で参政権支持を明確に表明できない結果となった。NCWの規約には、家庭と国家が思考、感情、目的意識の統合により向上するがゆえに、女性は家庭と国家の発展のために組織を持つと書かれている。⁽²¹⁾1895年、NCWは70万人の会員を擁した。これは全米女性参政権協会(NAWSA)、WCTU、Women's Publishing Association(女性出版協会)、National Federation of Baptist Women's Missionary Society(全国自由バプティスト女性伝導協会)に並ぶものである。NCWに招待された文芸クラブは唯一ソロシスであった。この機会にクロリーはソロシスの影響力を強めようと努めた。ニューイングランド女性クラブ(NEWC)は招待されなかった。NCWの中心人物、フランシス・ウィラードはソロシスがNEWCより創設が早かったと勘違いしたことから手続き上こうした結果になったとNEWCに謝罪した。また、NEWCはソロシスよりも女性クラブとしての性格が濃いと自己弁護もした。しかし、すでにソロシスは女性クラブ運動の主導的地位を得ていた。1888年12月の国際女性協会の会合の後、クロリーはソロシスの創立21周年を記念し、全国女性クラブ連合を設立する場をもうけた。1889年5月、ソロシスはあらゆる文芸クラブを統合した。ニューイングランド女性クラブはこれに参加しなかった。そして、1890年に全国女性クラブ連合(GFWC)がニューヨークで結成された。GFWCの当初の目的はNCWより保守的であり、単に地方、州、国レベルの女性クラブを統合し、お互いの協力を要請しようとする程度のものであった。GFWCはすでに存在しているクラブの独自性をそのまま認め、結束を固めようとしただけであったため、地方のクラブはこぞってこれに参加した。1910年、GFWCの会員は百万人、1916年には会員数は二百万人に拡大した。

(2) 活動方針の転換

1896年の大会で女性クラブ連合は次のように宣言した。「訓練された主婦はそれぞれの地域共同体で公的な家事を司る母体となるべきである」と。⁽²²⁾女性の家庭を守る役割を強調しつつ、革新主義改革運動の一翼を担う改革の発想がここに示され、それは明らかに単なる文芸クラブ活動や教養主義を越える意味を持つものであった。女性クラブの活動は、したがって、当初は

何らかの意味で家庭との関わりを持つものからスタートした。しかし、クラブ員はしだいに家庭以外の問題にも関心を示すようになった。その関心の多様性は1890年から1910年の間に女性クラブ連合が可決した決議の中に見ることができよう。公教育、地方政治改革、青少年労働法、公共サービス改革、刑務所改革、高速道路の安全性、自然保護、禁酒、女性に対する保護法制定などがその例である。

GFWCは大衆の注目を集めた。リーダーの多くは上流階級の富裕な女性であった。GFWCはアメリカ国内外で結成された。さらに、各地の女性クラブ活動も活性化し、互いに協力をはかった。一方で、こうした地方の活動は国レベルの活動にとって警戒の対象ともなった。1897年、ニューヨーク州西部では地方の20のクラブが州の組織に参加することを拒まれた。クラブの一つが参政権支持であったことがその理由であった。ニューヨーク州組織は参政権を革命的であるとして、それを認めず、さらにGFWCは地方に向けて宗教と政治に関する議論を避けるよう指導していた。1912年になってニューヨーク州組織が参政権支持のクラブを受容した結果、1914年にはニューヨーク州のクラブ運動は30万人の会員を擁するに至った。この頃になると、クラブ運動は文芸クラブ的性格から改革クラブ的性格へと変化した。法律、医療、ビジネス、政治についてのクラブも生まれ、総じて社会改革を志す運動へ転換する傾向が見られる。

GFWCは地方のクラブの活動を吸収し、自らの利益とした。地方のクラブの活動家の中央への招聘、統合のための地方への人員の派遣などがそれである。また、クラブ員が一同に会する会合も隔年に開かれた。1906年には情報センターもニューハンプシャー州ポーツマスに設立され、同様なセンターが各地で開設された。GFWCの設立時、クロリーは「ウーマンズ・サイクル」を編集しているが、地方のクラブは独自の雑誌を発行した。それらの雑誌の内容は女性クラブ運動の紹介のほか、著名な女性運動家の紹介記事、書評、音楽評なども掲載した啓蒙的なものとなっている。1889年のソロシスの会員の多くはすでに文芸よりも社会問題に関心を持つようになっていたことがそれらの報告から読みとれる。クロリーは改革運動が文芸活動の後に来るべき任務であるとし、「クラブ女性であるという仕事」の著者のAlice Winter Ames（アリス・ウィンター・アムス）もまた文芸クラブは改革への道程であるとした。⁽²³⁾

こうした変化の背後には新世代の女性の参加がある。1869年以降に成長した世代の中産階級の女性は大学教

育を受け、家庭外で仕事を持つことが一般的となった。より活発で積極的な新世代の女性は文芸クラブのような場を経ずして、自己アピールを行い、社会参加をするすべを心得ていた。家庭外で家庭内の不満を解消することを目的とした旧世代と比べて、新世代の女性は世界へ向けて行動すべく自信を身につけていた。

改革の一環として行われた事業の一つが1896年のヴァーモントでの図書館の建設である。1903年にはロード・アイランドで図書館が建設され、1907年、女性クラブ連合はこの事業に対し州の支援を受けた。1911年、ロードアイランドの図書館事業は州の手に渡った。アメリカ図書館協会の報告によれば75パーセントの図書館が女性クラブとの関連を持っているとのことである。女性クラブ員と学校教育との関わりも重要である。クラブ員は幼稚園から大学まで、その施設からカリキュラムに至るまでを検討し、忠告を与えている。

時代の趨勢は文化的啓蒙から社会改革へと移行した。これに対応して、GFWC内の活動は容易に変化したのだろうか。文化活動を重視するクラブの中には改革を敵視したものも存在した。しかし、1905年のニューヨーク州の女性クラブ連合の会合では文化活動はもはや女性の関心を集めることはなく、この頃から女性クラブは改革指向に変化したと見ることができる。改革を実践するにあたり、女性クラブ員は専門家の意見を求め、事前の調査を怠らなかった。20世紀の女子教育についてはプリンマー大学長のCarey Thomas（カレイ・トマス）に、子供の労働に関する法規については上院議員Albert Beveridge（アルバート・ベバリッジ）にその調査を依頼し、女子クラブ連合の産業委員会委員長にはセツルメント運動で署名なFlorence Kelly（フローレンス・ケリー）を任命した。

GFWCは他の改革組織とも協力関係を保った。教育に関しては大学婦人協会に賛同し、禁酒についてはWCTUに同調した。また、女性と子供の労働法改革についてはWomen's Trade Union League（女性労働組合連合）を支援した。GFWCは全国家庭経営協会、全国市民協会、全国教育協会ともコネクションを持ち続けた。実際にGFWCの指導者は他の組織でも活躍していた。会長を務めたHenrotin（ヘンロティン）は女性参政権、平和運動に積極的に参加した。彼女は全国女性労働組合連合の会長も務めた。同じくGFWCの会長を経験したDecker（デッカー）も政治活動に積極的に参加した。Eva Moore（エヴァ・モア）も会長経験者であるが、同時にAssociation of Collegiate alumnae（大学卒業生の協会）（後のAmerican Association of University Women 大学婦人協会）の会長、全国女

性議員協会の会長を歴任している。

GFWCの活動が会議での決議に表現されている以上に実践的であったという事実はその月刊誌に見られる。一例として1903年のGFWC会員からの編集者宛の書簡を以下に引用する。

六歳の子供が合衆国のあらゆる地方の工場で雇われている限り、子供の労働に関して統一された法の必要性を痛感する限り、家庭経済の知識の欠如のためにアメリカで家庭経営に六億ドルが浪費されている限り、山岳地帯や農村地帯に住む女性たちが本や芸術に飢えている限り、女性と子供のための家が作られ保護され、国レベルの灌漑法を求める一般感情を喚起する必要がある限り、最も有力な社会的善のための仕事が協力によってのみ結果をもたらす限りにおいて、どのクラブも広い世界に責任がないと言い得ようか？自らの家の埃を落として十分と言い得ようか？⁽²⁴⁾

子供と労働についての問題は改革者の注目するところであり、女性クラブの月刊誌もこの問題を取り上げ、女性の注目を喚起した。次に掲げるミネソタ州ピーターソンの記事は富裕な女性に向けて同胞である工場労働者の女性に目を向けよと訴えている。

合衆国の様々な工場で八百万人の賃労働者女性が雇用されている。毎年、この数は増え続け、そのうち半数の女性が21歳以下であることを考えると、彼女たちを保護するべくあらゆる努力をしようと思う。女性の労働の問題点は古い仕事新しい場で、新しい手段で行われていることにある。産業界でのこの変化と女性の労働の要求は女性にとって好ましいものではなく、女性が望んでいるものでもなく、女性の労働が安価であり、産業界がそれにより金銭を節約するためである。ほんの一握りの人間が特別な訓練によって自分に適した仕事を得る。しかし、工場の女性は男性のように自分の関心をそこに見いだすことはできない。組織化はこれを可能にするであろう。しかし、今日、大多数は若く、未経験であり、給料も安く、忙しく、生活に手一杯で他のことを考えるには疲れすぎており、また無知であるため健康、産業の状況の保護について考慮する状況にない。組織化のテンポも遅く、自らの関心について注意深くない。多くの女性が余暇を得ることができるのはこうした女性たちが工場や商店や他の施設で働いているためである。したがって、余暇を多く持つ女性は労働者の女性を支える義務がある。公的見解は物事を実現可能にする。それ故に、彼女たち、わが姉妹たちの必要性のために公的見解を形成することは

私たちの義務である。彼女たちは特に次の二つを必要としている。一つは熟練工として産業界に入れるための学校での職業訓練である。もう一つは同じ産業界で雇用を規制する法、すなわち時間、衛生、給与、女性による視察に関する法の制定である。労働法がきちんと整っていない状況は改善のための大きな障害であるという事実を認識するために公的な意見を集約することがあなたがたの義務である。⁽²⁵⁾

1898年6月にデンバーで開かれたのGFWCの隔年の大会で採択された労働者女性と子供についての決議に続いて、女性クラブ連合の女性と子供に関する産業問題委員会が二つの回覧文書を発行し、州の労働法の調査と労働問題の調査のために組織化すること要望した。これに関し、同大会において以下の決議が満場一致で可決された。

より多くの機会をもつ女性が自らを救済することのできない労働者のために役に立つべきであるという権利と正義の要求を信じるがために私たちは失礼ながら次の決議を提出するものである。

決議1. 合衆国政府は少額の給与所得者の便宜のために郵便貯金のシステムを確立するよう求められる。

決議2. 十四歳以下の子供は工場、工作所、商店、事務所、洗濯場で働かされることなく、十六歳以下の少年が鉱山で労役につくこともないものとする。

決議3. 合衆国において十四歳までの子供に肉体的訓練を含む適切な学校施設が供給されるべきである。また、あらゆる地域で適切な学校法が遵守され、厳しく強制されるべきである。

決議4. 工場、作業所、洗濯場ならびに商業施設で、女性と子供の最大労働時間は8時間を越えず、一週48時間を超えないこととする。

決議5. 統一労働法が異なる州で確立されること。

決議6. 女性クラブ連合内のクラブは常設の委員会を設置し、その職務は地域特有の女性と子供の労働条件を調査することとする。州の女性クラブ連合は同様の委員会を設置し、州の労働法を調査し、衛生ならびに女性と子供の保護に関する法を調査する。これら委員会の任務は労働法とこの種の州法を施行し、それらに影響力を持つことである。この委員会は定められた時間にこれらの組織に社会ならびに工業の進歩についての会議や大会の開催を通知し、女性クラブ連合は五名よりなる委員会を持ち、その仕事は上記の仕事の報告を集め、

今回の隔年の大会で結果を報告することである。

以下、この決議内容に関心を持つメンバーを地方の女性クラブが募り、その氏名と住所を全体委員会に送るよう指示が出された。また、その氏名と住所に基づいて全体委員会が提案できる忠告と手助けを盛り込んだ第二の回覧書が地方委員会に送られることが決議文に明記されている。そして、しばらくの間、地方委員会は全国女性クラブ連合により採択された決議につき十分に議論し、何らかの変更がなされるべきか否かを決定するようにと決議文は結ばれている。⁽²⁶⁾

この第二の回覧書を次に引用する。この回覧書は National Consumer's League(全国消費者連盟)の仕事に注目するよう促すものであり、労働問題、ストライキの支持なども掲げた画期的なものである。

全国消費者連盟の仕事は研究そして手本として推奨できるものである。消費者連盟はニューヨークとボストンで成功を収めており、フィラデルフィアとシカゴに支部が結成された。連盟についての情報は代表のフローレンス・ケリー夫人から入手できるはずである。社会問題の効果的な学習を行うためには自分の視点の変化はさほど重要ではない。委員会のアドバイスは次のような点にある。

- (a) 状況の改善を求め戦っている人々の要望について知るために労働、改革関連誌の購読を薦める。
- (b) 労働者の集会に参加すること。特にストライキの時に。また、改革への関心を示すような学生集会を訪問すること。
- (c) 産業、経済を主題とする書籍や雑誌を公共図書館に置くように願い出ること。

結論を言うならば、私たちは委員会にこの主題が目下著名な頭脳明晰な人々の間で注目を浴びているものであることを思い起こさせることが必要なのである。議論に活力と生命力を与えるのは知識を持つことを前提としている。この件は議論を生み関心を呼ぶであろう。他の主題はこれに匹敵しないであろう。このことに精通しないならば時代遅れである。逆にこれに精通することは現代の切迫した世界の潮流に乗る鍵である。

パシー・フェントン・オトレイ

アンジー・H・ヒューム

マリー・ヤング

コリンヌ・S・ブラウン ⁽²⁷⁾

各州、そして町の女性クラブ会員がこの呼びかけに

応じ、多くの法改正がなされた。以下に掲げるのは、地方の法改正の例である。

ペンシルバニア 青少年労働改革者が大いに満足し、大きな法改正が州知事によりなされた…十四歳から十六歳までの労働者は一日に九時間労働とし、州八時間は学校に通うものとする。その時間は州五十一時間の中から差し引かれる。二十一歳以下の少年は夜間の配達仕事には従事しない。歩道での商売は最低年齢を十二歳とする。

アーカンソー アーカンソー州は最低賃金法の通過を報告している。熟練労働者は一日に九時間で一ドル二十五セント、見習い労働者は一ドルの報酬を得る。家政業と農業に類する仕事についてはスミスレバー財団の予算を当てる。

ネバダ 法制委員会の議長、バード・ウィルソンはネバダ州は努力に見合った結果を得られなかったと考えている。しかし、向上のための対策が決定された。それは次の四部門である。

- 1 母への助成金(補助金)
- 2 相続法の改正

独身で死亡した子供の半分の財産が母の相続となる。かつてはすべて父の所有となっていたものである。母は自分の名義で権利として半分を得るものである。

- 3 すべての地域社会で学校の評議員により幼稚園を設立する資金を提供する。両親の請願により二十五名の幼稚園児に相当する年齢の子供たちがそこに住む。

- 4 教員の退職金

テネシー テネシー州議会は休会中であるが、前半に二項目の法案が女性クラブ員の強力な支持のもと通過した。それは少女のための更正施設の設置法、女性が教員委員会の慈善事業の役員になることを可能とする法案である。

メイン 法務委員会議長ジョージ・F・フレンチが明確な思考と信念を持ち、恐れることなく次の項目を披瀝した。

我々は以下のことを確保するように支援した。

- 1. 女子のための州立の保護施設
- 2. 十六歳以下の少女と子供のための週五十四時間労働の遵守
- 3. 労働者の補償金制度
- 4. 看護婦の登録

ミズーリー 法務委員会議長M・P・ケイスは成果を上げた社会法の中に以下のようなものがあると記述した。

州全体の非行法廷法
裁判所による禁止命令とその失効についての法
精神薄弱者の隔離
母への補助金法
公立学校センター
女性警察官
アイオワ 十六歳以下の青少年の労働時間を一日八
時間とすること
街に運動場を作る法
身障者、貧しい子供たちのために無料の提供をす
る計画
ロードアイランド 州の女性クラブ連合は移動図書
館のための経費を確保するために働いた。街頭で
の交易を規制する法の成立をも支援した。
イリノイ、ミシガン 青少年労働の最低年齢をそれ
ぞれ十六歳、十五歳に引き下げた。⁽²⁸⁾

全国女性クラブ連合の会員のすべてが改革運動に熱心であったとは言えない。労働問題については無関心で、ひたすら地域の文化活動や学校、図書館への支援に没頭した地方のクラブも多い。また多くのクラブは革新的な行動を取るのをためらった。単独で改革について発言した女性もいたが、実践的な行動につながらなかった例も多い。ほとんどのクラブが未だ文芸クラブの域を出ていなかった。しかし、程度の差はどうあれ、女性たちが家庭という領域から出て、より複雑な問題を抱えた世界へと進出するために女性クラブの果たした役割は大きかったと言えよう。

十九世紀末の革新主義の原動力の一つに女性の手による改革を掲げることができる。女性による改革は1830年代の道徳的改革運動に端をし、様々な形態に発展した。女性クラブ運動はこの改革のひとつであり、女性を伝統的役割から解放し、意志決定機関へ参画する道を開いた。この改革思想の根底にあるのはドメスティックフェミニズムであり、家庭を第一義とする発想である。したがって、クラブ員が家庭にとって脅威であるとの批判に対しては、クラブ員は自らのあるべき場は家庭であると考えており、家事もすべてこなしていると反論した。⁽²⁹⁾クラブ員の Helen Winslow (ヘレン・ウィンスロー) は小説の中で、夫であれ子供であれ自分を必要とする人が家庭にいれば自分のことに没頭することはないと描写し、女性クラブの活動は家庭のためと規定した。そして、家庭の幸福のためという意味がなくなれば女性クラブの存在理由もないと断じた。その一方、女性による改革運動の中で注目された共同家事経営を唱道し、慈善活動を女性性を広めるという

大儀のもとに正当化している。

しかし、十九世紀末になると女性性という概念自体が揺らぎ始めた。女性が職場や公的分野に参加することで、男性文化、女性文化の区別がなくなりつつあった。女性が大工仕事をするのも男性が家事を行うことも説かれるようになった。女性クラブ連合はこのような時代の変化に対応したとは言い難い。女性の領域こそが彼女たちの守るべき砦であったためクラブ員は執拗にそこに注目するよう喧伝した。また、大衆の保守性に注目し、それを支持せんがために黒人女性の参加を禁じ、女性参政権をも否定した。1900年、黒人女性はボストンにおいて黒人女性による女性クラブを結成する。GFWCは白人女性の組織として確立した。女性クラブ連合は女性労働組合や消費者連合と共闘したが、貧しい人々の問題を真剣に取り上げるには至らなかった。移民者に対しても、彼女たちはアメリカ優位主義の立場をとり、同化政策を支持した。1903年のニューヨーク州の女性クラブ連合大会においても「なすべきことは外国人的要素を社会全体の他の部分と調和させること、すなわち外国人をアメリカに同化させることである」と決議している。⁽³⁰⁾

こうした差別主義は革新主義の持つ保守性に起因する。1900年以降の組織化の流れはこの期の多くの社会問題や政治的社会的緊張感に対する回答である。その背後には経済と富の集中、地方と国レベルの政治の腐敗、都市のスラム化、労働条件の悪化と雇用の不安、買春の蔓延、生活スタイルの激変などがあげられ、革新主義はその解決を模索するプロセスであった。その目標は法の変更にあり、経済的には個人主義の徹底であり、政治的には民主主義の保全であり、人道的な改革を主張するものであった。その中には女性ならびに青少年の労働法の見直し、セツルメント運動、禁酒運動、道路の清浄化、請願運動、知事の直接選挙に関する要求、女性参政権も含まれる。女性クラブはこの一環を担った。革新主義は一部の例外を除けば改革主義であり、経済、政治、社会の根本的な変更を求めるものではない。革新主義が主に中産階級のアメリカ人の注目を集めたのはこうした理由による。そして、これこそが社会に寄与し、慈善的であり、かつ彼らの良心のよりどころとなり得たゆえんである。ジャーナリズムも企業の不正、スラムの貧困、労働条件の悪化について書き立て、教育を受けた女性はスラム街のセツルメントに住み、こうした社会悪を実感することになった。ジェイン・アダムス、リリアン・ワルドのような傑出した女性がセツルメントを社会改革の中心に据えた。革新主義運動に参加した女性の多くが全国女

性クラブのような既存の組織に参加した。革新主義改革を担うために生まれた女性組織に National Settlement Association(全国セトルメント連合)、全国女性労働者組合連合、全国消費者連盟がある。女性の結束により成立した法に清浄食品ならびに薬品法（1906年成立）青少年労働法（1916年成立）がある。

(3) 女性クラブ連合と女性参政権

全国女性クラブ連合において女性参政権が論じられたのは二十世紀に入ってからである。1906年、連合の産業相談部会が女性参政権を強力に支持した。これは American Federation of Labor(アメリカ労働連合)が女性参政権支持を表明したことを受けてのことである。1907年、Carry Chapman Catt(キャリー・チャップマン・キャット)が女性クラブ連合にこの件で協力を求めたとき、女性クラブはこれを受諾し、女性参政権は公的に論じられるべき議題となった。1910年、シンシナティでの大会には女性参政権がプログラムの中に組み込まれた。前会長のサラ・デッカーは今や女性参政権なしには改革はないと論じた。これには半数を超える賛同者があった。三百二十人の代表が参政権夕食会に出席、そのうち百人が夕食会の後のレセプションに出席した。1912年の大会で参政権賛成者はさらに増加した。テキサス州ヒューストン出身のW・W・Bain(ベイン)は新聞記者に対し次のように伝えている。

もし連合がこの会議で女性参政権を支持しなければ、何千ものテキサスの女性は代表団になぜかと問うでしょう。ここが女性会議ならば、女性参政権の問題はこの国の女性に関わる最大の関心事であり、行動に移すべきものだからです。⁽³¹⁾

しかし、南部では依然黒人女性票を警戒する声も強かった。黒人女性が白人女性より数において勝っている事実を揚げ、人種主義を表明する女性クラブ員も多かった。北部の連合がこうした意識を払拭するのに貢献した。1912年、ニューヨークの連合は参政権に関し以下のような決議を提出した。

女性が経済的な理由であれ産業界ないしは公的活動に参加し、また他方で思慮深い女性たちが扶養する子供たちの保護を確かなものとし、また賃労働者である女性たちの正義を保証し危険な社会状況を取り除くために、現在のような女性の間接的な影響力では無駄の多い過程を踏むと認識したがため、さらに投票権は物乞いより効果的かつ尊厳のある方法であるがために以下のことを決議したい。ニューヨーク州女性クラブ連合はこの国の女性に投票権を与え

る合衆国憲法修正案の提出を支持する。⁽³²⁾

これに対し、この決議が政治的なものであり、非政治的であるべき女性クラブ活動にはそぐわないとの批判もあった。1914年、女性クラブ員はようやく女性参政権は家庭や家族の生活にとって危険なものではないとの認識を持ち、参政権獲得に同調し、参政権はドメスティック・フェミニズムを推進するものであると主張するに至った。女性キリスト教禁酒同盟の会長フランシス・ウィラードは「家庭を守るための参政権」を唱えたが、ニューヨーク女性クラブ連合会長の Bell de Rivera(ヴェル・ドゥ・リベラ)もこれに同調し、次のように述べた。

女性が行くところどこにでも家庭がある。女性が子供を学校に行かせれば彼女の家庭は学校となる。子供が工場に出かければ、彼女の家庭は工場である。女性がこの国の法に違反すれば罰せられる。法を作る上で女性の声は反映されるべきである。⁽³³⁾

1914年のシカゴにおける会議で、女性クラブ連合は公式的に参政権支持を表明した。2年前の参政権批判の声は止んでいた。イリノイ州ではこの行動がイリノイ州最高裁判所での州における参政権法の合憲性の決議に影響を与えるとの憶測の元、参政権論者の間で期待が高まった。1914年6月13日、シカゴの公会堂に百七十万人の女性クラブ員の代表として数千人の会員が集まり、以下の決議がなされた。

文明国において、男女の政治的平等の問題は今日、議論されている中でも最も重要である。それゆえに以下の決議を表明する。女性クラブ連合は政治的平等主義に対し、道義的支持を表し、性別のいかなを問わず政治的平等の原則への心底からの信頼を記録することとする。⁽³⁴⁾

会長の Anna J. H. Pennybacker(アンナ・J・H・ペニーバックー)が投票を求めたとき、二名の反対があったが、その二名はロードアイランドとデラウェアの出身であり、南部出身者は賛成にまわった。新聞報道によればあたりは耳をつんざくような喝采につつまれ、ジュリア・ワード・ハウによる「共和国戦いの賛歌」を女性たちが歌い始めたとのことである。

1914年の大会は参政権を表明した記念すべき大会となったが、参政権以外にも革新的要素が多く盛り込まれた。実力本位の任用制度、服装改革、買春禁止等がそれである。以下にその決議文を引用する。

男女の政治的平等の問題は今日、文明国では重要

な課題として論じられている。ゆえに以下のことを決議する。

決議 全国女性クラブ連合は男女の政治的平等の問題について道徳的支持を与える。そして、性別に関わりなく政治的平等の原則を信ずることをここに記録する。

決議 全国女性クラブ連合は州の連合並びに地方のクラブに対し、州ならびに市の健康局に対し、予算の増大をはかるための積極的な政策を採用するよう奨励する。

決議 大会は州政府に対し、病気の予防のために大学が拡大業務を行うよう各大学に考察を薦めるよう指示する。

決議 少年局に子供の性衛生学の指導用として母親が使用できるわかりやすい情報を盛り込んだリーフレットを発行するよう要請する。

決議 全国女性クラブ連合は各州、地域の政府に性病ならびに他の感染症、伝染病の報告を要求する法の制定を求める。

決議 全国女性クラブ連合はアイオワ州や他の十州で成功している不良住宅を街から廃する法を複雑な経緯なしに失効させ、禁止させることを認める。

決議 この会議は個人の完全な権利の承認を行い、心底より女性の服装が簡素で柔らかなデザインとなることを好ましく考える。

決議 全国女性クラブ連合は国ならびに州の農林省に社会組織を推進する運動の保証を求め、州の連合に女性の仕事を担う社会組織の発展を強く要求する。

決議 都市委員会の州の議長は公的な議論のために学校や他の公共ビルを社会センターとして活用するための法を施行する努力を州が率先して行うよう要請する。

(中略)

決議 アルコールの運搬がこの国の犯罪、悪事、惨めさの原因の四分の三をしめることを考慮し、全国女性クラブ連合の女性たちはアルコールの販売に反対である旨記録に残し、この悪を廃止する州法ならびに連邦法に賛同する。

決議 教育省に地方の学校の改善のための副委員会を創設する。⁽³⁴⁾

女性クラブ員の参政権支持表明の遅れの原因は彼女たちのフェミニズムへのスタンスにある。彼女たちは女性こそ家庭を守る主体であり、それが女性の特権であると考えた。彼女たちは女性の美徳とされる道徳的

価値を公的場にもたらそうと自負していた。1914年に女性クラブ連合が女性参政権を支持した背景には、この頃になってようやく男性も女性参政権が家庭崩壊をもたらすには至らないと確信した状況がある。男性も妻が女性クラブ員であると断言できる環境が整った。女性クラブは社会に好意的に受け入れられるようになった。女性参政権運動家と女性クラブ員が手を組み、同じ目標に向かう土壌が生まれ、女性が自らの意見を述べるのが可能になったのである。

1868年にドメスティックフェミニズムを説いた女性クラブはヴィクトリア朝の女性に課せられた純潔、宗教的敬虔さ、家庭的であること従順こそ女性の美徳であるとし、社会に対し、道徳的完成を求め、様々な慈善事業を行った。1890年の女性クラブ連合の成立は女性を公的分野に進出させるきっかけとなる。女性クラブ連合が取り組んだ分野は多岐に渡る。家事の共同化、自然保護などの公共事業、青少年の労働や非行の問題、最低賃金などの労働問題、男女共学などの教育問題がそれである。女性参政権運動に見られるような先鋭性を欠いているが、女性クラブの持つ穏健な手法が19世紀後半から20世紀初頭の女性を魅了した。「女性の領域」という概念はこの期の女性運動を読み解くときに、現在でも有効である。家庭という私的領域を守り、その範囲で「権利」を要求するのではなく「平等」を模索する女性クラブ運動は当時の女性に受け入れ可能なものであったし、そこに女性による「改革」の一端を見ることができだろう。

註

1. Demorest's Illustrated Monthly Magazine and Mme. Demorest's Mirror of Fashions "Physical Life of Women," August 1872 p140
2. Mrs. Jane Cunningham Croly, Sorosis, Its Origin and History (New York: Press of J. J. Little, 1886) pp8-9
3. The Revolution, September 24 1868 and October 8 1868
New York World, April 23 1889, p1 April 24 p4 May 17 p2 May 22 p5 October 23 p10
4. New York World, November 6 1868 p8
5. Julia A. Sprague, compiler, History of the New England Woman's Club from 1968 to 1893 (Boston: Lee and Shepard, 1894) p45
6. Woman's Parliament, pamphlet, June 1 1869, Sorosis Papers, Smith College

7. New York Tribune, October 5 1869, p5
8. New York World, October 25 1869 p12
9. The Woman's Journal October 11 1873
10. New York Herald October 16 1873
11. The Woman's Journal November 21, 1891
Report of a Supplemental Woman's Congress in
St. Paul, Minnesota, October 1871
12. AAW Papers, Third Congress of Women, 1875
pp91-92
13. Buffalo Daily Courier, October 20, 1881
14. Chicago Daily Tribune, October 18 1874
15. October 14 1875
16. Topeka State Journal, June 13 1896 p40
17. Mrs. T. J. Bowlker, "Woman's Home-making
Function Applied to the Municipality," Amer-
ican City, 6 1912 p863
Ida Husted Harper, "Woman's Broom in
Municipal Housekeeping," Delineator, 73
February 1910 pp213-216
Sarah Comstock, "Her Town in Order," Collier's,
48 March 9 1912 pp38-39
18. Diaz, Only a Flock of Women (Boston:D.Lothrop,
1893) p126
"Talk with Mrs. Diaz," Portland (Maine) Eve-
ning Express, 9 December 1896
19. Diaz, Only a Flock of Women pp82-83
20. Harriet A. Townsen, Reminiscences of Famous
Women (Buffalo: Evans-Penfold, 1916)p29
21. Anna Garlin Spencer, The Council Idea and May
Wright Sewall (New Jersey: J. Heidingsfeld
Co.)1930 p12
Countess Aberdeen, "International Council of
Women in Congress," Nineteenth Century, 46
July 1897 pp18-25
Aberdeen, "International Council of Women in
Congress," North American Review 169 August
1899, pp155-153
- Mary Lowe Dickson, "National Council of
Women in the United States," Arena 17 February
1899 pp478- 493
Gilbert Parker and Mary Wright Sewall, "Inter-
national Council of Women," Fortnightly
Review, 72 July 1899 pp151-159
F. H. Low, "A Woman's Criticism of the
Woman's Congress," Nineteenth Century, 46
August 1899 pp192-202
F. H. Gafney, "Reply to a Woman's Criticism of
the Woman's Congress," Nineteenth Century 46
September 1899 pp598-611
22. Mildred White Wells, Unity in Diversity; The
History of the General Federation of Women's
Club
General Federation of Women's Club 1953 p198
23. Alice Ames Winter, The Business of Being a
Club Woman New York: Century 1925 pp6-7
24. Wells, Unity in Diversity, p37
25. Agnes L. Peterson, "Women Inspectors for
Women at Work," General Federation of
Women's Club Magazine, 1914 p36
26. New York Public Library Collection
27. New York Public Library Collection
28. General Federation of Women's Club Magazine,
June 1915 p27
29. Helen M. Winslow, The President of Quex: A
Woman's Club Story Boston: Lothrop, Lee and
Shepard, 1906 pp185-186
30. Kate Holliday Claghorn, "Social Conscience and
the Immigrant Population," NYSFWC Scrap-
book, 1902
31. RISFWC Scrapbook
32. NYSFWC Papers
33. Della A. Stewart, "A Record of Golden Years:
History of the NYSFWC, 1894-1914," NYS-
FWC Papers